

成相観音靈驗譚の一考察

高倉 瑞穂

〔抄録〕

成相寺は丹後・天橋立を見下ろせる成相山中腹に位置する真言宗寺院である。古くから丹後半島周辺の地には多くの在地信仰が生まれ、発展した。元伊勢と呼ばれる籠神社、日本三大文殊を有する智恩寺、そして西国三十三所の札所となり観音信仰が繁栄を極めた成相寺などである。成相寺の本尊聖観音菩薩の靈驗譚として、現在『今昔物語集』『古本説話集』を中心とする多くの説話集に採録されたものを見ることが出来る。その中で『法華驗記』の章段には「齋遠」という僧の話として成相観音靈驗譚と酷似する内容を収録する。同時に、その後「丹後の国某 書かず」とし、内容を省略している

章段が存在する。現在の研究では、『法華驗記』から『今昔』に繋がる伝承関係が指摘されるものの、本説話を巡る上では必ずしも言い切れない疑問を残す。同時に数少ない文献で仮説をどこまで論証として構築できるのかが当該研究の課題でもあった。本論では、成相観音靈驗譚をもとに、当時の在地信仰も探っていくことで、在地での靈驗譚の発生と変容の一考察をする。

キーワード 成相寺、丹後、観音信仰、天橋立、西国三十三所

一 おしめこ

日本三景・天橋立は、その堂々たる、かつ繊細な姿で人々に様々な幻想を与え、日本海・若狭湾に横たわる。神がいます場所と繋がっていたとされる天橋立は、まさに自然が生み出した奇跡であり、我々はその姿

の壮大さに圧倒されずにはいられない。そうした神秘に満ちた景物などには、その存在ゆえに、人間たちは常々多くの浪漫とともに靈物としての伝説を作り出してきた。天橋立もその例外ではない。これを中心として、周辺には多くの信仰が誕生していることは周知の通りである。周辺には今でも深い信仰に支えられる寺社が多く存在し、今回取り上げる成

相寺に加え、三大文殊として有名である智恩寺、そして元伊勢として名を馳せる籠神社というように位置的にも天橋立を中心として繋がっていることがうかがえる。この地域はかつて「府中」とよばれ、在地の信仰も非常に深い地域として知られている。繁栄の様子は「成相寺参詣曼荼羅」や「慕帰絵詞」などの文化財によっても確認することができるだろう。

この丹後半島あたりは、古代・中世にかけては云うまでもなく畿外であり、平安京内を中心とする文化圏とは一線を画していた。かつては「丹波」であった呼び名が、いつしか「丹後」と呼ばれるようになっていく。しかしそれは逆に、在地における独特の文化が発展する機会を与えられたということであり、これらの地域では都とはまた異なる独自の文化が広がり、発展していった。当地の寺社に限ってみても、雪舟の「天橋立図」では智恩寺、籠神社というモチーフを実に大きく、目立つように描かれており、繁栄の様子を伺い知る事ができる。

当地で語られた伝承は、あるいは説話へ、あるいは寺社の縁起などへと記述に残っていくことになる。都で語られ、そして作品にも残されたそれらの話は、一方で都とは一線を画す在地の信仰を取り入れていくことに繋がっていく。高みから天橋立の全体を一望することが出来る成相寺は、聖観世音菩薩を本尊に据える古刹として人口に膾炙する。成相寺の観音靈驗譚は『今昔物語集』『古本説話集』、そして最終的には『三国伝記』へと伝えられて、多くの人に知られるところとなり、現在に至る。近世期には、西国巡礼の一般民衆への広がりや、『西国三十三所霊場記』などを代表する多くの書物が現れていくことになるが、説話での広がりには『三国伝記』でひとまずの結末を迎えるといえよう。ところが『今昔』

が関係する『法華伝記』には「斎遠譚」として、成相観音靈驗譚に酷似する説話が載る。本論は、多くの信仰の場として栄えた丹後地方で、成相寺を中心として展開された観音信仰を、成相観音靈驗譚の伝承していく中の文学的問題点とともに、周辺の寺社においての天橋立の描かれた様子なども参考にしながら、諸相の一考察を行っていく。

二 成相観音縁起の諸相―肉になる観音―

成相寺は、京都府北部、現在では宮津市に位置する真言宗寺院である。成相山と呼ばれる山の中腹に位置し、現在では道路交通も整備され容易に参拝できる場所となった。近世期の記録(元禄二年版『伽藍開基記』等)には、慶雲五年(七〇四年)に真応上人が建立し、聖観音を安置したことに始まるとされ、西国三十三所第二八番札所に指定されている。西国三十三所巡礼の成立については多くの先行研究がなされており、日増しに多岐方面にわたる西国巡礼の問題点が明らかになってきているといえるだろう。平成二十年秋からは西国巡礼中興とされる花山法王の千年忌に当たるとして各霊場の観音が開帳になるなど、現在までもその信仰は絶えておらず、我々の身近な存在にあるが、研究の分野ではややそれと性格を異にする。そのため、西国三十三所における現在の研究動向を今一度簡潔にまとめておくことにする。

そもそも西国三十三所巡礼のおこりとしての縁起・伝説には、長谷寺僧徳道上人が作ったといわれる説がある。『中山寺縁起』では徳道上人が死に、閻魔大王に出会い、布施として巡礼を賜って中山寺を一番札所にしたということが述べられる。これが、七十八年のことと言われ、そ

の後巡礼が廢れて、花山院が九八六年に再興したということが、中世期に及んで書かれていくことになる。しかし、徳道が蘇生して巡礼開始したというのは伝説としてはともかく、現実的ではない。さらに花山院再興という説に至っては、草堂行願寺や西山善峰寺などが花山院在世時にはまだ創建されていなかったため、この説を支持するには無理がある。

そこで、行尊が始めたという巡礼は一〇九三―九四以前と推定され、行尊巡礼が最初であろうと研究者に通説化されてきた。しかし速水侑氏は、この行尊観音霊場三十三所巡礼記が前後内容に密接な関連がないことや、二十五番「新熊野奥」は行尊存命中には未だ勧請されてなかったことなどから、行尊巡礼は後人の仮託だとされ、現在では否定されるに至る。

これに対して、三井寺僧覚忠の巡礼記録には信憑性が高く、巡礼途中華嚴寺と穴太寺で詠んだ和歌が『千載和歌集』にも残されていることなどから、現在では覚忠が応保元年（一一六一年）に巡礼を始めたという説が有力視されている^①。さらに、西国巡礼が民間に広まるのは中世中期から末期を待たなくてはならないが、平安中期から末期にかけて、僧などが霊験あらたかな観音霊場を巡っていたということの証拠といえるだろう。

このように成立していった西国三十三所の中に成相寺が加えられることになるのは、その地域の靈性もさることながら、やはりこのような地においても突出すべき観音信仰が広がる場であったことが指摘される。成相寺本尊・聖観音菩薩の靈験譚は、現在我々が目にする縁起を見ると次のように記載される。

一人の僧が雪深い山の草庵に籠って修業中深雪の為、里人の来住もなく食糧も絶え何一つ食べる物もなくなり、餓死寸前となった。死

を予感した僧は「今日一日生きる食物をお恵み下さい」と本尊に祈った。すると夢ともうつつとも判らぬ中で堂の外に狼の為傷ついた鹿が倒れているのに気付いた。僧として、肉食の禁戒を破る事に思い悩んだが命に変えられず、決心して鹿の腿をそいで鍋に入れて煮て食べた。やがて雪も消え里人達が登って来て、堂内を見ると本尊の腿が切り取られ鍋の中に木屑が散って居た。それを知らされた僧は観音様が身代りとなって助けてくれた事を悟り、木屑を拾って腿につけると元の通りになった。此れよりこの寺を成合（相）寺と名付けた^②。

こうした現代に伝わる成相寺に関する記述は説話集に述べられたものを軸に書かれているが、骨格として、縁起作成の参考にされていると思われるものが『今昔物語集』、そして『古本説話集』である。以下『今昔』での成相観音霊験譚を、全文は長文に亘るため一部割愛しながら引用する。

『今昔物語集』丹後國成合観音霊験語第四

今昔、丹後國ニ成合ト云フ山寺有り、観音ノ験ジ給フ所也。其ノ寺ヲ成合ト云フ故ヲ尋ヌレバ、昔シ、佛道ヲ修行スル貧キ僧有テ、其寺ニ籠テ行ケル間ニ、其ノ寺高キ山ニシテ、其ノ國ノ中ニモ雪高ク降り、風嶮ク吹ク。而ルニ、冬ノ間ニテ、雪高ク降りテ人不通ズ。而ル間、此ノ僧、糧絶テ日来ヲ経ルニ、物ヲ不食ズシテ可死シ。雪高クシテ里ニ出デ、乞食スルニモ不能ズ、亦、草木ノ可食キモ無し。：寺ノ戌亥ノ角ノ破タルヨリ見出セバ、狼ニ被取タル猪有り。「此ハ観音ノ与給フナメリ。食シテム」ト思ヘドモ、「年来、佛ケヲ憑ミ奉テ、今更ニ何デカ此ヲ食セム。聞バ、『生有ル者ハ皆、前生

ノ父母也』ト。我レ、食ニ餓ヘテ死ナムト [] 肉村屠ブリ食ハム。況ヤ、生類ノ肉ヲ食人ハ、佛ノ種ヲ断テ、悪道ニ墮ツル道也。然レバ、諸ノ獸ハ人ヲ見テ逃去ル。此ヲ食スル人ヲバ、佛モ菩薩モ遠去リ給事ナレバ、返々ス思ヒ返セドモ、人ノ心ノ拙キ事ハ後世ノ苦ビヲ不思ズシテ、今日ノ飢ヘノ苦ビニ不堪ズシテ、劔ヲ拔テ、猪ノ左右ノ股ノ肉ヲ屠リ取テ、鍋ニ入テ煮テ食シツ。其ノ味甘キ事无並シ。：而ルニ間、人々、皆、入り来ヌ。人々、「何ニシテカ日来過シツル」ナド云テ、寺ヲ廻グリテ見ルニ、鍋ニ栓ノ木ヲ切り入レテ、煮テ食ヒ散シタリ。：僧、驚テ佛ヲ見奉ルニ、人々ノ云ガ如ク、左右ノ御股ヲ切り取タリ。其ノ時ニ思ハク、「然ラバ、彼ノ煮テ食ツル猪ハ、観音ノ我ヲ助ケムガ為ニ、猪ニ成リ給ヒケルニコソ有ケレ」ト思フニ、貴ク悲クテ、人々ニ向テ事ノ有様ヲ語レバ、此レヲ聞ク者、皆、涙ヲ流シテ、悲ビ貴ブ事无限シ。其ノ時ニ、佛前ニシテ、観音ニ向ヒ奉テ白シテ言サク、「若シ、此ノ事、観音ノ示シ給フ所ナラバ、本ノ如クニ [] 申ス時ニ、皆人見ル前ヘニ、其ノ左右ノ股、本ノ如ク成 []。人皆、涙ヲ流シテ [] 泣悲スト云フ []。此ノ寺ヲ成合ト云フ也ケリ。

(『新日本古典文学大系』(鈴鹿本)による。空欄は欠字部分。)

以上が『今昔』の当該説話の骨格であるが、『古本説話集』の内容は「猪」が「鹿」になるものの、ほぼ『今昔』と同内容の文章が載せられ一致しており、『今昔物語集』の欠落部を補う形になっている。古代・中世期において本靈驗譚はさまざまに姿を変え、現在に至っている。その名に「成相観音」もしくは「成合観音」の靈驗説話として採録されている説

話集を挙げると、これらのほか『宝物集』巻四、『三国伝記』巻第八と続く。これに加えて十卷本『伊呂波字類抄』、『阿婆婆抄』などといった説話集以外の作品でも見られ、その展開は非常に大きい。鎌倉初期頃に成立したとされる十卷本『伊呂波字類抄』には、

在丹後国與謝郡日 郷狭屋山

草創不弁何歳檀那不議誰人前碧海後踞青山故老相傳日本是方丈草庵
唯一一權手半觀世音木像山陰谷深崩音禪僧久住此山忽逢深雪之天尅
人跡不通件僧在其中粒食已絶飢来不憂念佛端坐有一鹿来臥砌下僧往
見之鹿即命終僧念云汝已斃畢我将死害食汗穢蓋救命根性此念訖採刀
至屠百葉肉死一日倍他時猶有餘肉遺在器底受佛詣佛所仰瞻尊顏股割
血流宛如生身爰悲泣愍慙愧于時佛像疵愈成相如初故為寺

とし、いつ、誰の創建かは書かれず、「禪僧久しくこの山に住む」、「鹿来りて臥す有り」、「股割れ血流る」とある。食べたのは鹿であるが、僧が切り取ったとされる場所も「股」で一致する。十卷本『伊呂波字類抄』に見られるこの成相観音靈驗譚は、基本的な構成としてはほぼ『今昔』などと同系列に加えられる説話だろうと考えられる。それよりも早く成立したとされる『色葉字類抄』には内容を示す本文の記述がない。平安期には、既に成相観音の靈驗譚が都の方にも浸透していた。次に、七卷本『宝物集』では、

成相の観音は、猪にかはりて行者にくはれ給ふ。：(中略)：成相の観音の、猪になり給ふといふは、丹後の国に観音のけんふく所あり。行者おこなひて居たりけるが、大雪ふりて人もかよはぬほどに、行者うへてしぬべかりけるに、猪の死にて、堂のうしろにありけれ

ば、行者、しなんよりはとて、かみそりをもて、脇の下をきりて、くひて命いきて、みれば、観音の脇をきりやぶりてぞありける。猪はうせにけり。

鹿から猪への変化、観音が身代りになった部位として股ではなく脇とされる。他作品で脇を切られるという記述がなく、成相寺縁起として最も重要な、肉の残りを観音像に付け合わせると元の通りに成り合ったという記述が抜け落ちていることから、『今昔』などは別系統に伝わったものではないか。『阿婆婆抄』諸寺略記上には、

成相寺者。

在丹後国。本尊一搦手半^②手半南作千手観音ノ木像也。草創檀那共ニ不知之。昔在禅侶。久住此山。屬苦寒之節。忽逢深雪之天。封地丈餘。人跡不通。粒食已絶。飢来不憂。念佛端坐。有一山麋来死。砌下僧自ラ念言。汝已斃畢。餓婦^③死。宛^④宛南作完食汗穢。盍救命根。操力前聖^⑤屠百葉肉充一日齋。起居輕利。猶有餘肉。遺在器底。當于是時。信心檀那推凍凌雪尋人聲来。忽憶死麋。行欲掩匿。麋去無跡。餘肉不見。詣佛前瞻尊像。股割血流。宛如生身。懊惱無益。檀越至時。先説此事。慚愧發露帰僧。留昏旦悲泣。佛像瘡愈。成相如初。今為寺號。

とあり、観音像自体の造り方の記述がされるなどの要素が指摘されるが、内容については先の『伊呂波字類抄』とほぼ一致する^⑥。開創や檀那を分かつたらずとするのは、『今昔』らの記述と同じである。こうして受け継がれてきた成相観音靈験譚は、最終的に『三国伝記』により、中世での変容の到達点を迎える。全文は長文にわたるため一部を抜粋する。

彼ノ寺ヲ成相ト名付ル故ハ、昔シ、仏道修行ノ貧僧アリ。(…中略…)
草堂ノ戌亥ノ方ノ破タル間ヨリ外面ヲ見出シタレバ、狼ニ被タル噉殺猪有リ。此ハ即チ観音ノ与ヘ給フ所ゾヤ。「此ヲ食シテ」命ヲ助ケバヤト思ヒケルガ、夫レ生アル者ハ皆生々ノ父母、世々ノ兄弟也。我剃髮ヲ染衣ノ身トシテ、縦ヒ命ヲ失フトモ争カ是ヲ食セン。(…中略…)

其ノ時キ、里人此ノ僧雪中ニ粮断テ定テ死ヌラント哀ミ、若シヤト粮ヲ裏山ニ登ルニ、向上ト見揚レバ山峨々トシテ地軸遙ニ浪ヲ挙げ、直下ト見ヲロセバ海漫々トシテ天ノ橋立「雪ニ浮ベリ」。雪踏分テ僧ヲ見テモ夢かトゾ思フト悦ケル。人々云ク、「サテモ日比ハ何トして存命シ給フゾヤ。降り積ル雪ハ消トモ、御命ヲバヨモ嵐ノ松ノ烟ト成シ奉ラント思ヒ、遙ニ上リ侍ル也」ト語り、皆涙ヲ流シケル。僧ハハヅカシナガラ壇越ニ向テ在ツル次第ヲ語ツツ、発露涕泣シテ、其死セル猪ヲ見ルニ、都テ不見。如何事ニヤト思ヒ、食ヒ残セル猪ノ肉ヲ人々ニ見セケレバ、皆檜木ノ切ニテゾ有リケル。僧俗不思議ノ思ヲ成シ、偏ニ観音ノ利生方便也ト思ヒ、本尊ノ御前ニ詣シテ頂礼シ奉レバ、観音慈悲ノ双眼ニ泪ヲ浮べ、大士忍辱ノ両股ヨリ血流タリ。敬テ能々拝見スレバ、無ク疑モ彼ノ僧ノ猪ノ肉ト思ヒ食セラルハ此菩薩ノ御身也。時ニ、此ノ僧稽首敬畏シテ、食残セル檜木ヲ御ン股ニ押相セ懺悔発願スルニ、諸人見ル所ニテ、忽ニ尊像如ク本の成相給ヒケリ。自其以後、彼ノ寺ヲ成相寺ト号シテ、今繁昌セリ。眺望殊勝ニシテ弘誓ノ海闊、靈験無双ニシテ清浄ノ光円也云云。

(『中世の文学 三国伝記』(無刊記版本)による)
『三国伝記』は基本的に先に成立した説話集とほぼ同内容であるが、『今

昔』や『古本説話集』に比べて追加要素が多く、また美文調を駆使したといわれる『三国伝記』の特徴として、村人が堂にやってくる際に、山の上からの天橋立の美しさを描く場面がある。変容は甚だしいが、話の骨格としては変更点は無く、内容が揺らいではない。

このように『今昔』以下、諸作品を見比べた結果、根本的な話の筋道は大きく変わることはない。例えば、僧が食べた肉は「鹿」と「猪」との違いなどは、当時の音ではともに「シシ」であり、特別な区別があったとは言えないし、また雪解けの後、堂にやって来る村人の反応や、それに対する僧の反応というものも大きくは逸れてはいない。『三国伝記』の村人が山からの天橋立の美しさを奪われる場面では、既に当時、信仰が民衆の中で一般化し、さらに成相寺が天橋立を望む景勝地であることが庶民の中にも浸透していったことを確認できる。また、御伽草子である渋川版御伽文庫『梵天国』では、

姫君は成相の観音とあらはれ給ふ。中納言は、久世戸の文殊となり給ひて、衆生を濟度し給ふなり。かたじけなしともなかなか、申すはかりはなかりけり。羅刹国にて、御宿貸し参らせし、おうぢうばは、成相寺の鍵取の御前、これなり。当代までもはやらせ給ふ、成相の観音、九世戸の文殊の御本地、すなはちこの御ことなり。

とされ、智恩寺の文殊と成相寺の観音の本地が語られるに至る。この話は先行する米田ハーバード大学美術館蔵絵巻には『橋立の本地』とし題が異なり、橋立を中心として周辺寺社の関連させた物語が成立している。神谷吉行氏は、こうした丹後の地を舞台とした『梵天国』成立の経緯として、「高藤をめぐる寺社や人物の史的背景を媒介として、丹後の地の

成相観音・久世戸の文殊の本地譚へと結びついて行った文芸であったに違いない。そしてまた一方では、妻観音や霊水信仰としての清水寺が、智恩寺縁起の智水の話や竜神信仰とも結合して、ついには成相寺の男女成合う再会譚にまで昇華していった一篇の草子でもあった。」と述べられる⁴⁾。丹後という地で生まれていった各地、各寺社の信仰は、中世に入るとそれぞれを取り込んだ『梵天国』のような作品を生み出すきっかけとなった。それは、おのおのの信仰が、在地に根付き、そしてついには遠く都人らの知るところになったことに他ならない。

現在「橋立観音」という通称名でも親しまれている成相寺聖観音像は、その身代り靈驗譚の話をもとに、さらに位置という問題からも天橋立自体と深い関係を持っていた。天橋立の両端に文殊と観音の名で知られる智恩寺、成相寺の存在するこの地は、在地信仰事態の発展もさることながら、都人がはるばる丹後の地へやってきた時、天橋立を見るときにも周辺寺社への参詣に誘われるようになる。丹後地域への信仰については、中世後期の社寺参詣は、平安後期以来の高野・熊野詣をはじめ、富士・戸隠・立山・大山など全国各地の霊地霊山へ訪れる人々が多くなった。西国三十三所観音霊場の一つ成相寺は、日本三文殊の一つとして文殊信仰で盛えた智恩寺とともに、室町時代以降の水陸交通手段の発達により社寺参詣も庶民化し数多の参詣人の集う所となった。かつて天橋立を遊覧した覚如上人が成相寺に参詣したように、天橋立遊覧の旅は成相寺や智恩寺への参詣を誘い、成相寺や智恩寺を巡礼することはすなわち天橋立を賞翫することに他ならなかった⁵⁾。とされ、特に中世後期には西国巡礼の広がりも相俟って、丹後に巡礼の

ために赴く者が多かった。西国三十三所の民間への本格的浸透は江戸時代になってからであるから、一般民衆に対してすべてがそうであったとは言えないが、都にすでに知れ渡っていた成相観音の靈驗譚、天橋立自体の靈性に対する信仰など、この地域自体が大きな信仰対象として存在していたことから、他の地域に比べ、人々の関心も高かったことは容易に想像できる。その中で、大寺院となり発展した成相寺を、信仰の媒介として広がっていく過程が見えてくるのである。

そのように信仰の中心部にあった成相寺の観音靈驗は文学作品に記され、展開していく。成相観音靈驗譚についての先行研究は決して多くはないが、『今昔』に先駆ける作品『法華驗記』の存在が度々指摘されている。卷中七五には僧名を「三井寺僧齋遠」と記し、飢えの果てに鹿を食べるものの、成相についてはまったく触れられず、法華經功德によって身代りになった靈驗のみを記述する。ところが『法華驗記』の構成、そして内容話の類似性から、当作品が『今昔』に描かれる成相観音靈驗譚へ繋がるのが通説となっており、疑われることがあまりない。ところが、成相観音靈驗譚がどのように成立していったのかという問題を考えると、『法華驗記』と『今昔』『古本説話集』の関係は、発展過程に疑問を残すことになる。成相観音靈驗譚の展開を考える上では、『法華驗記』が描く身代り観音靈驗譚を再度精査する必要がある。

三 『法華驗記』に描かれる身代り観音靈驗譚

この成相観音靈驗譚の基本を形作るのが、観音が肉に代わり、破戒を起し僧がそれを食べるといふ行為である。観音は表面上身代りとして

僧に施しを与えるが、その結果この行為は僧の「破戒」をもたらす。確かに基本的な戒律としては不殺であり、「狼二被取タル猪有り」とあるから、僧の手に介されることなくすでに死んでいることは想像できようが、後に僧自身が、「年来、佛ケヲ憑ミ奉テ、今更ニ何デカ此ヲ食セム。」と本人が言っている以上、この行為に破戒の要素がないとは言えない。中世では破戒が一般的になったとされ、大きな四つの戒律以外では基本的に懺悔すれば許されていたというが、観音が肉になって破戒を起こさせる、という特殊な構造がこの話には垣間見える。肉食説話自体は多く存在するが、観音から施され破戒を行う例は、特徴的であると言える。⁶⁾

現在成相観音靈驗譚を引く作品は多く、それについても言及がなされているようであるが、次節に取り上げる『法華驗記』など不審な点が多く存在しているのが現状である。発見されているテキスト類の少なさなどから推論を多く含んでしまう感も否めないため、現在先行論を見る限りでも当たり障りのない論を出すにとどまっている。そこで、推論をおそれず、また空論とならぬよう現在残された文をもとに考えるところなのか、この節では、今一度『法華驗記』の精査とともに、成相観音の関係性を述べてみたい。

諸書の内容を対比的に理解するため、ここでまず『法華驗記』における本文を確認しておきたい。『法華驗記』卷下七五に齋遠法師として観音の靈驗譚が載せられている。⁸⁾以下、対比のため順を追いつながら相違点を指摘していきたい。後の説話にも関わる重要な箇所は傍線を施してある。

沙門齋遠は、東寺の住僧にして、周防国の人なり。少年の時より法花を誦して、堅固にして退かず。盛なる年の頃に迨び、生れたる国

に還り到りて、玖珂郡の三井山寺に住せり。その寺の観音、靈驗掲焉なり。比丘、法華経を誦して、香花を供養し、数年籠り住せり。

齋遠という人物が年を取り、故郷である周防国三井山寺に戻ってきたところから始まり、既に人に知られる存在と化していた三井山寺という舞台で靈驗が語られ始める。この「三井山寺」は「二井」(現在では新寺)とされているが、ここでは原文に即して表記することとする。僧も法華経を誦し、観音を供養しながら長年住んでいた。

大雪高く積りて、人跡通はざること、数十日に及びて、殆に飢死すべし。比丘飢を忍びて、法華経を誦せり。晨朝に庭を見るに、狼の鹿を殺せるものあり。比丘穴を取りて、これを食して命を継ぎ、華を献りて経を誦せり。兩三日の間、この鹿の穴を食して、鍋に入れて煮たり。

ある年の冬、大雪に降られて堂中で餓死寸前の状況におかれ、齋遠は飢えをしのいで法華経を一身に誦した。すると翌朝、庭を見ると狼が殺した鹿の遺体が横たわっていた。僧は二三日の間、この鹿の穴を鍋に入れて煮て飢えをしのいだという。しかし里から人が来る季節になると、ある異変が起こる。

里より人來れば、僧、穴を食することを恥づ。人即ち鍋を見るに、柏の木を煮蒸すぞといふ。僧、穴の柏に變じたることを見て、いまだ曾よりあらざることを得たりとおもふ。人に向ひて本縁を説けり。聞く人歡喜し、感じてこの言を作さく、観音の慈悲、持経の法力は、応に自らに然らしむべしといへり。

鹿の肉と思つて食べていたものは実は柏の木であり、このようなことは

今まで無かつた利益であり、観音の慈悲と法華経誦の功德が僧に語られる。

聞く人歡喜し、感じてこの言を作さく、観音の慈悲、持経の法力は、応に自らに然らしむべしといへり。比丘後に観音を見るに、観音の御腰皆割き切られて、大きな空の穴あり。定めて知りぬ、権に御身をもて、死したる鹿の形に變じて、持経者に施したまへることを。

比丘このことを見畢へて、弥信心を生じ、大道心を発して、観世音を念じ、法華経を誦せり。後々の神變は述べ尽すべからず。

観音像を見ると腰が切れ、穴が開いており、この一連の事件からさらに僧は観音と法華経を敬うのである。『法華驗記』の齋遠法師として語られるこの話は、齋遠説話として掲載している。食った肉の種類、観音の切り取られた場所など細部では異なる部分を指摘出来るものの、先述した現在の成相寺縁起と酷似していることは言うまでもない。『元亨釈書』においてもこの話はほとんど変わらず齋遠伝として載せられており、沙門齋遠が受けた観音靈驗としてある。成相寺観音靈驗とほとんど変わらぬこうした説話の存在は何を意味するのだろうか。

すでに成相観音靈驗として載せられる『今昔物語集』においての原典は何かという点においては、岩波『新日本古典文学大系』などを見ても「出典未詳」とされている。また小学館『新編日本古典文学全集』は頭注に『法華驗記』との対比が書かれてはいるものの、出典としては確定しておらず揺れている。これは先行研究でも指摘されている『法華驗記』卷中八四の問題が存在するからだ。本文には、

卷中八四 丹後の国某 書かず

とあるだけで一切内容文が無い。現在『法華験記』は版本しか残されていないため、これを後の版本作成者の人為的脱落と見るが、現在この「書かず」の説話が成相寺観音靈験譚だったかという指摘があり、斎遠法師として書かれた巻中七五が成相観音譚ではなく、もともと周防の山寺観音靈験譚と、この「書かず」の丹後の話の内容が酷似しすぎていたため、巻中八四を「書かず」として脱落させたと推測されている研究も存在する。林恒徳氏は、

八五話（『今昔』巻一六第五話と同話）の前の八十四話が「今昔」巻一六第四話の丹後国の貧相の話と同話であった、と考える余地はあろう。この場合は、中巻七十五話にはほぼ同一の話があるので、重複を避けて省略したという風に考え得ることになろう。

と述べられており、成相寺観音靈験譚の研究史上でこのような考えは林氏以外にも少なからず論ぜられている⁹⁾。ただ、林氏自身その論文の上で「はつきりしたことは不明」と述べられているように、確かにこの段階で研究はほぼ停滞していると言ってもいいだろう。

こうした論の根拠となるのが、林氏も指摘される巻中八五の感世法師譚の存在である。この一話はいわゆる「穴太寺縁起」として、『今昔物語集』巻一六―五「丹波国郡司、造観音像語」にも載せられている。つまり『法華験記』の内容を七割方典拠として見ると見えるように、二話一類形式として「書かず」と「感世法師」の話を『今昔物語集』が典拠として引く張ったことが指摘される¹⁰⁾。本当にこの話は『今昔物語集』に繋がっていく内容であろうか。逆にいえば、斎遠譚のようにあまりに似通った観音靈験譚が存在すること自体に疑問が呈されるべきなのではな

いか。今一度語られた観音靈験譚の流れを見るため、これら三作品の成相寺観音の描かれ方の差異を確認したい。

『法華験記』斎遠譚は、常に三人称視点の、文章を語り手が語るという形式を取り、結びも持経者、つまりは法華経を誦する者に述べられるような観音の利益がやってくると述べられる。諸説話との関係は以下の対応表でも示しているが、大きくは、

① 『法華験記』斎遠法師、『今昔』『古本説話集』など「貧しき僧」になっ

② 舞台が周防国（実際は新寺の誤りだが）三井寺であり、一方は丹後の観音靈験聞こえる山寺であること。

③ 『法華験記』では法華経誦による観音の効験が得られたことに對し、『今昔』以下観音を常に拝んでいたことによる効験が得られたことによること。

④ 僧の前に現れたものが猪と鹿が混在、作品によりばらばらであること。

⑤ 現れた肉に對してあつさり肉食戒を犯し、華を奉って経を唱える『法華験記』に對し、『今昔』らは迷う僧の描写が増え、破戒後もその行為について後悔すること。

⑥ 話末が『法華験記』では観音への信仰を強める要素とし、法華経誦の尊さを説くが、一方で『今昔』『古本説話集』では成相観音の靈験であり、効果はこれだけにとどまらないということを中心張ること。

以上のようなことが指摘できる。多くの要素に富むこれら説話集を俯瞰

したとき、一見、本筋的な『今昔物語集』『古本説話集』と『法華験記』巻七五の繋がりが密接であると認めてもよいように思われる。これらの説明には、現在残された史料の少なさと、散逸『宇治大納言物語』などの関連からも、さまざまな推論が可能であるが、今はその点は置いておく。しかし、先述したように、巻八四の「書かず」の段の存在、また続く巻八六の感世法師の話が『今昔』一六一五、つまり成相観音靈驗譚の次にくる穴太寺観音靈驗譚と繋がっていくため、こうした二話一類としての『今昔』の成立から、『法華験記』の構成を考える根拠になっている。「書かず」の巻八四は『今昔物語集』巻一六―四「丹後国成合観音靈驗語」、もしくは同じ丹後の話である巻十五―二三「始丹後国迎講聖人、往生語」であろうかと考えられてきたところが、もつとも注目されるべき重要な箇所であり、この点をまとめると以下のようになり、この仮説を捉え、真偽を確かめる必要がある。

I 『今昔』巻一六―四が仮に『法華験記』巻八四の内容であったらうとすると、そもそも『法華験記』は巻七五で使われたほぼ同内容の話を再録する必要があるのか。ただし、『法華験記』巻一―一二九を通覧する上では同話再収録は見られない。

II 『法華験記』で斎遠の話として収録され、法華経功德を中心に観音利益を説いた話が、『今昔』らでは「貧シキ僧」などとあるように開基や檀那をわからずとして観音説話のみを記す。そして「観音」という言葉を多用し、観音を中心に据えた本格的成相観音靈驗譚と化している。これらは同じ系列の説話として捉えられるのか。

III 『今昔』が『法華験記』の二話一類形式として受容されているという

のは、『法華験記』第八四が丹後、第八五が「穴太寺縁起」の元となる感世法師譚であることが根拠となっている。しかしそもそも『今昔物語集』は『法華験記』を承けたという結論は正しいか。

このような疑問点が浮かんでくることになるだけであるためどうしようも参考にしたか否かなどは水掛け論になるだけであるためどうしようもないが、実際『法華験記』一―一二九話までのつながりとしては、多くが『今昔』の原典となったということが余計に理解をややくしくさせている原因でもあろう。少なくとも斎遠譚と成相観音靈驗譚を対比させたとき、これら両者が直接的に書承関係にあったというのには疑問が残る。こうした作品の伝承状況は安易に結論を出すことは難しいが、遺された本文をもとに、解釈の可能性を見出す必要性も忘れることはできない。在地では系統を異にする展開をしたのではないか。そこで、成相観音靈驗譚を取り巻く基礎的な問題点であることを指摘、確認した上で、在地信仰の展開へと話題を進めたい。

四 成相寺と丹後在地の信仰

丹後がかつては丹波とされており、その歴史は古い。京から遙か北、大江山を越え日本海に面したこの地は、京内とは違って独特の文化を育み、天橋立という神秘的な景物を中心に神道や仏教が各々独特な発展を遂げる。ところが、古代においてこの丹波・丹後地方に観音信仰がどのように伝来し展開していったのかは明らかにされていないとは言えない現状にある。現在、考古学などの面にも目を向けてみると、丹波地方では、綾部市長松寺に伝来を不詳とするも奈良時代前期の制作と推定される観

音菩薩立像の小金銅仏が遺存し、この地方に残る観音像の最古例として注目されている。また、観音信仰の起源を考える上で、寺伝の域を出ないが、丹波国穴太寺・丹後国成相寺・同松尾寺の西国三十三所霊場寺院の創建がいずれも慶雲年間（七〇四〜七〇八）に集中していることもその鍵の一つとなる¹¹⁾。

平安時代になるとこの地方の観音信仰にも広がりを見せてくるようになる。大正時代に編集された『与謝郡誌』によると、「開山は真応上人一に齋遠禪師と号す。真応上人は其伝詳ならず、元亨釈書には周防の人なりとあり郷里三井寺にあり」と書かれており、齋遠の名前も見える。ところが、ここに述べられる通り『元亨釈書』を調べてみると、齋遠伝として確認でき、その中には、「タマ〜ツノ狼、庭ニ来リ、鹿ヲ殺シテ去ケルヲ、齋遠ハ、鹿ヲ煮テコレヲ喫シ、誦供ヲツトムルコト、先ノゴトクナリシ」と狼が鹿を殺すところを齋遠自身が見たかのような記事に変わっており、ほぼ『法華験記』を忠実に引く内容が確認できる。ところが、開山の真応上人については『本朝高僧伝』等の書物に見られる応永年間にいたという臨濟宗僧の真応の名しか見出せず、詳細が不明である。ただし、こうした開山の話は『成相寺古記』という近世期の史料には、

成相寺ハ者古伝記ニ曰ク精舎之来由ハ者人王四十二代文武天皇ノ御宇慶雲元年甲辰秋九月十一日建造之地ナリ也縁起ニ曰ク開山ハ者獵者ナリ也宿善開發而染絹スト云

とあり、開山は獵者になっている。この書物にはさらに、応永七年（一四〇〇年）に山崩れがあり、その後堂を下に移転したとする記述が

みられる。『今昔』ら説話集に対し、高僧に注目する『元亨釈書』などは、本文の骨格としては類似したものと捉えることができるが、観音の功德により僧が救われ、仏像が元通りになるという重要箇所が欠落している。寺院縁起において本尊功德を脱落させることは考えにくい。成相寺の縁起制作には事情がありそうである。

成相寺の歴史を辿ろうとした時、文献によれば十五世紀中ごろには与謝・丹波両郡に九十ヶ所、六十町あまりの所領を有する地域最有力寺院であったことが第一に言われる¹²⁾。山内に子院や塔頭を従える一山寺院として栄えた成相寺は徐々に修行僧や山伏が赴くようになり、成相寺は次第に霊場化されていった。『梁塵秘抄』には「四方の霊験所」として成相の名が示されており、既に院世紀ごろには成相が修験の修行場として知られていたことが意識される。また、同時にこの頃は先述した、覚忠が西国三十三所巡礼を行った時期と重なり、それ以前に観音霊験の功德とともに、人口に膾炙していたことの根拠と考えることができる。『今昔物語集』はまさにその頃、十一世紀半ばごろ、『古本説話集』もそれを追うように数十年後に成立したと考えられており、このような説話の成立過程には勸進僧らの存在を忘れることはできない。速水侑氏は、

『今昔』に収められたこれら説話の多くは、伝統ある有名寺院の勸進を請け負った唱導の聖たちによって語られたのであろうが、さらにその背後には、寺院教団から離れ、全国各地の別所を拠点に唱導などを通じて民衆に布教活動を行なう、有名無名の多数の聖たちが存在した。また、院政期の「聖の住所」は、こうした著名な霊場に限らない。無名の山寺や岩窟にも教団を離れた聖たちが住みつき修

行していたのであり、それらの山寺や岩窟も、聖が名声を得るとともに、新たな霊場として人々の参詣を集める¹⁵⁾。

とされ、既に古くから知られていた熊野那智や書写山円教寺、勝応寺だけでなく、成相寺のような辺境にある山寺にさえも注目されていたと述べられる。この点は都鄙論の方面からも考えられるべき問題点であろう。このような速水氏の観点をもとに、文学的問題点を考えたとき、成相観音靈驗譚は都で広がっていた齋遠説話を取り込み、寺院の縁起として成り立たせていったのではないだろうか。平安時代中期には『日本往生極楽記』などといった「往生」をテーマとする作品が作られていくに至る。それは京周辺においてはかなりの浸透を見せ、いかなる修行で往生が可能になるかを模範的に説く作品は重要な位置にあった。『法華験記』も『日本往生極楽記』からも多くテーマを受け継いでおり、その意味では系列の一つに加えられる。そうした齋遠伝にある三井寺の、非常に寒冷な地に存在すること、観音信仰あらたかな寺であること、といった類似点をもとに、天橋立という靈性の援助も受け、成相観音は一大観音霊地として縁起を語っていたのではないか。そうして在地の信仰と、西国三十三カ所の始まりという転機とともに、その話が広く都にも広がっていくようになる。

こうして出来上がった説話(靈験譚)の伝播に関連する重要な点として唱導というものが挙げられる。説話が語られるとき、そこには唱導活動というものの存在が間に挟まれ、その効果によって次の説話が作られるというのである。岡見正雄氏はこのような元となるテキストのことを「小さな説話本」と呼ばれ、

説話が中世に於いて所謂唱導と言はれる様な場に於いて生きてゐた事は度屢々指摘されてきた事である。古くは天仁三年の「法華修法百座譚」の如きものがあり、これを見ると法会の場に於いて比喩因縁譚として語られる場合が多かつた事がよく判るのであり、更にさういふ場合に引用される説話が集成された時に説話集が生まれてきた事は十分に考へられるのである。しかし、中世の説話集には必ずしもそれだけの目的から生じたのではなく、たとへば有職故実的な知識として覚書的に集めた様な場合もあつたと思われる。しかし説話が直接唱導の場に於いて利用されることがはつきりと判るのは：(中略)：言はば小さな説話集と言はれるもの存在である。それは個々の説話が直接説教の種本である事を示してゐるのである。と論ぜられたことがある。この「唱導」については黒田彰氏が、

唐招提寺本『取鷹俗母縁』巻首に、「本朝法華験記下」という出典注記の存することは、：(中略)：説話集から談義書の作られる方向もあり得た訳だ。それは、説話文学と唱導との有機的連関からして、いわば当然のことである。しかし、談義本が一般的に説話集に帰せられる筋合のものとないことは、確認を要する。そこには往還の差があり、一次的な事実と二次的なそれとの厳然たる相違が存しよう。還流の相を警戒すべきことは勿論だが、唱導から説話文学への一線こそが本流である…

と述べられる¹⁶⁾。つまり、このふたつの作品はそうした時代の中、すでに在地信仰として人々に知られていた成相寺が、一般的に知られていく一つの道具が『今昔物語集』であり『古本説話集』であつたという。そう

した時に成相寺観音靈驗譚の成立を考えようとした時、前提としてすでに丹後という在地で有名であった観音信仰の中に、成相寺も例外ではなかったため、当然在地では観音の靈驗を称えたテキストが造られることになる。それはまさしく速水氏が仏教学の観点から述べられるような唱導の聖が説教の際に使うような説草がもとだった。つまり豆本としてあるそうした唱導の原テキストが、縁起として説話になり、そして当然それは民衆に伝播しこれを布教していくことに繋がっていく。速水氏の観音についてのこの話をもとに考えると、聖への唱導活動があるとすれば、それは地方における縁起の制作になる。

このように成立し、地方で広がっていく説話は、時代が下って行くにつれて、ある土地で現れていった縁起・靈驗譚を、一つ一つとして説話集として採取されていくようになり、それがさらに僧に代表される人々の活動となっていく。こうした在地の伝承は観音信仰に結びつき、覚忠ら聖たちが西国三十三カ所巡礼として各地を回り始める。在地ではすでに靈驗あらたかなものとして成相寺・成相観音は知られており、『今昔』らはそれを民衆に伝播させる役割を担ったのだろう。一方で『法華驗記』はそうした成相在地の説話とは別系統として、周防国で知られていた観音靈驗譚を、天台法華の立場から、斎遠の法華経功德による説話とした。その結果、『今昔』では開基や檀那を不明として観音説話のみを記しているような事態に陥っていく。前節での仮説の回答を、推測も含んであえて述べるのであれば、まず『法華驗記』については一―一二九の多くの話が『今昔』につながっていくとされているのは、『今昔』に採られた説話の内容を検討したとしても肯けることである。それを認めた上で、

『法華驗記』の斎遠譚は直接その成相観音靈驗譚の原典として『今昔』やその前に存在していた説話集などに書承されていたのではなく、別系統と捉える方が自然であろう。『法華驗記』ではすでに伝わっていた成相観音靈驗譚を取り込もうとしたとき、斎遠譚に内容が酷似するのを躊躇い、あえて「書かず」として脱落させるに至った背景があるのではないか。言わば「原成相寺縁起」というものの存在を考慮することができる。成相観音靈驗譚にはおそらく、斎遠説話を中核としつつも位置的環境にも合う、成相寺という大きなまとまりの中で変容させていった可能性が考えられるだろう。そしてその背景には現実として、少なくとも成相周辺では観音を中心とする在地信仰としての観音信仰の基盤ができていた。

五 周辺寺社が描く〈天橋立縁起〉

冒頭で取り上げたように、丹後の地は非常に大きな信仰が介在する一大霊地であり、それは天橋立を中心とした構造が見える。京とは一線を画したこの丹後地方の文化は、日本海文化も巻き込んで独特の発展をした。本節では前節での在地の信仰や、寺社のおのへの信仰をもとに「天橋立」を中心とした一大霊所を形成する状況を取り上げてみたいと思う。京とは遠く離れた丹後における信仰の広がりについて神田秀夫氏は、

こういう時代に都鄙の懸隔、感情の断絶を、断絶に終わらせまいとするパイプが、もしあったとすれば、それは寺院だったと考えられる。(中略) 丹後の場合、そういう役割は成相観音が果たしていた。(中略) 成相観音の靈驗として伝える話を、たとえば今昔物語集に依って云えば、……麓の里々がいかに貧しく、又、この成相寺の

周囲の山々が狼や猪の出没する、いかにさびしい所だったかが察せられようというものである。これが平安時代中期の天の橋立をめぐる風土の生まな姿であり、

と述べられる¹⁶⁾。確かに、成相寺の御詠歌は、「波の音松のひびきも成相の風ふきわたす天の橋立」と言われており、『三国伝記』における天橋立替美の挿入句もこれに裏打ちされた感がある。都鄙の問題がここにもあり、信仰という面において京に比べて圧倒的不利な地形にある丹後地方は、こうした天橋立の描かれ方によって断絶せまいという動きを見ることができよう。

こうした成相寺に対し、天橋立の対岸上に位置するのが『梵天国』で中納言、成相観音の本地という姫様の相手になる久世戸智恩寺の文殊である。智恩寺の縁起を示すのが、東福寺禅僧として知られる正徹によって書かれた『久世戸縁起』である。

抑九世の戸あまのはしたてと申は、本尊は一字文殊、鎮守ははしたての明神と申。本地はおなじ文殊にて御わします事もかたしけなく、伊勢天照大神建立の処なり。

『久世戸縁起』はこのような始まりにより、現在天橋立上に社を置く橋立明神を鎮守とする久世戸を日本の「五台山の文殊」であると続く。

此地神第一第二神建立の所なり。かのあまのうきはしと申は如意を水にうけ給へば竜神よつて一夜に土ををき嶋となす。此嶋の道のとをき程三十六町なり。天人あまくだり給、一夜に千代のひめこ松を火をとほしてうへらるゝに夜もあけ、れば松をうへさして、火をすてられしところを今は火置と申なり。其松苗のあまりを火置の嶋に

すてらるゝに今にいたるまで松なへのごとくにてあり。然間この嶋をばあまのはしたてと申なり。明神と申は竜宮より出給かの九世の戸の鎮守なり。されば此明神をば伊勢にてはとしく大明神と申なり。天照大神も此としく大明神をともとしてよろづの事どもをさだめ給。さる程に地神第一第二天照大神、正哉勝々速日天忍穗耳尊二神してかの文殊をば戒岩寺より彼嶋にうつし奉り、明神をもおなじくかの嶋にすましめたてまつり給。はしたての明神と申なり。

この場所は天照の建てたところであるとされ、海に投げ込まれた仏具の如意に龍神たちが土を集めて天の浮橋と呼ばれるように至る。天人が、火を捨てた場所が火置の島と呼ばれるようになり、それが今には天橋立と称されるようになったと書かれる。さらに「さる程に伊勢天照大神も毎月日々に影響あつて、文殊を拝せらる」というように、天照が文殊を拝する記述もあり、これが日本三文殊としても名高い文殊菩薩を本尊とする智恩寺の縁起であるとともに、神仏習合が進んだ非常に大きな神話の舞台として広く認識されていた。『久世戸縁起』で記述される内容には、大きく神話と重なる中に、「豊受大神」の存在が見られる。本文では「としく大明神」と記載されるが、これは後で取り上げる籠神社でも大きな位置を占めており、周辺地域を含めて関係性は深い。伊藤正義氏は、

久世戸縁起は、伊勢神宮側にとつても重要関心ごとである筈の豊受大神や天照太神の由来を包みこんでおり、そのことが諸山縁起の一つとして、神道切紙中に収められるにいたつたのであろうと考えられる。

とされているが、こうした仏教寺院の縁起として神道の系譜の一つが

堂々と描かれる実際は伊藤氏が述べられる「一そう、神仏習合の時代のこの種の理解の広がり重視しなければならぬ」と言われる通りであり、奇怪ともいえ、今ひとつ整合性に欠ける内容の『久世戸縁起』の理解は丹後の地の信仰についても非常に重要な点であると思われる。本地垂迹の中で、仏の神への優位が着目され、対立されるものと見なされがちだが、こうした智恩寺という文殊信仰の大寺院において神話が語られる事実も、認識を変える大きな例であろう¹⁸。同時にこうした事実は、丹後という地が他の地に比べて大寺社が混在、共存する特殊な関係にあったことも大きく指摘されよう。

これに対して、成相寺側、智恩寺の天橋立を挟んで対岸にある丹後国一宮・籠神社には、文殊の久世戸靈験と類似しながらも神道的な由緒を記した文書が残される。まず、当社の縁起を記した『籠大明神縁起秘傳』には、

夫れ當社籠大明神は、即ち豊受大神^{彦火明尊}なり。古へ神代に老翁あり、塩土翁と名づく。一には事勝命と名づく。……或時天橋立松の梢に光り輝くもの有り、八方なる其形籠の如く、其の光影を神跡として奉齋す。乃ち是れ豊受大神宮の御神跡なり。齋き奉るの時、紫雲有りて其の宮の上を蓋ふ。故に其所を稱して天蓋谷と曰ふ。

と記される。天橋立の松の梢に籠のような光り輝くものがあり、それが豊受神だったということが書かれており、名前の由来もこれからであろうと言われる。また、この書物の下敷きとなつていとされる『丹後国一宮深秘』と呼ばれる文書には、籠神社がかつて吉佐宮と呼ばれ、伊勢内宮外宮それぞれに祀られる天照太神、豊受大神を祀っており、平安時

代には延喜式神名帳にも丹後国の最高神社として記載された¹⁹。

伊勢國御鎮座以前は、丹後國一社に雙住し給へり、神秘口傳在り。

されば伊勢の根本は丹後一宮與佐社なり。十一代の御門垂仁天皇の御宇、伊勢國ワタリヒ郡宇治郷御裳濯河の川上に遷宮し給へり。

其の後寶曆四百八十三年の後、人王廿二代の御門雄略天皇の御宇廿一年、勅に依り、丹後國與謝宮を山田原に遷し奉る。内宮は天照大神、地神第一の神なり。外宮は國常立尊、天神第一の神なり。皇太神のご託宣に依り、明年戊午秋七月七日、大神主佐々命、彦和志理命第二子なり。廿三年己未大神宮大神主に従ひ、丹後國與謝郡真井原の豊受大明神を伊勢國山田原に迎へ奉る。

ここには『久世戸縁起』に記された内容に類似しており、橋立明神の本拠地は智恩寺の文殊菩薩、その垂迹は橋立明神というようになったという記述も見受けられる。『一宮深秘』は丹後一宮供奉僧の大聖院智海の著作である。智海は、籠神社別当寺大聖院の住僧らしく神道にも精通し、当書物を南北朝の動乱期に書き記したとされる。そういった動乱の時代に対する危機感から最初の縁起が成立したようだ²⁰。いずれにせよ、天女の人数など細かな違いは見受けられるものの、天橋立というものを取り込んで、『久世戸縁起』らと比べてみても多くの類似点を感じられる。

豊受大神は、天照太神の食事をつかさどる役目を負う御饌都神として存在し、伊勢の地に迎え入れられ、現在、籠神社では奥の宮・真名井神社に祀られている。籠神社には最古の系図として代々神職にあたったとされる海部氏の系図が残っており、始祖は彦火明命、祭神に豊受大神が祀られていることから籠神社を伊勢下空の旧地とする説があり、この神

社が元伊勢と言われる所以なのである。²¹この地は日本海文化の拠点として独特の文化が根付いていた。日本海側には潟湖が多く存在し、それを利用して港が作られ、また大陸側と言う点からも、中国や朝鮮半島方面との関係も深かった。考古学の分野でもこの地方は注目されることが多く、同じ西国三十三所寺院の一つ、舞鶴の松尾寺には海にまつわる馬頭観音靈驗譚が作られており、地方における文化の繁栄の例としてあげられる。それとともに、日本海を越えて丹後地方にやってきた渡来文化は、天橋立を含む地域を通過しながら京へと流れて行ったことも重要な点であろう。大陸文化と京をつなぐまさに架け橋の役目を丹後が荷ったことも、繁栄を可能にした理由なのである。このような位置的に見る丹後の在地信仰、および日本海文化や都鄙という問題からも、天橋立を中心として、また都とは異なる独特な信仰の発展がなされていたことが明らかになる。後世、今に至ってもこの地が靈地として人々の心を捉えて離さないのは、このような信仰に裏付けされたものに他ならないと言えよう。

六 おわりに

成相観音靈驗譚が制作された事情は、都と地方との位置的問題からも、そして、すでに存在していた在地信仰からも、独自の発展をしたその一形態を見ることがができる。身代り観音靈驗として『今昔物語集』をはじめ、それ以降の説話集などに採られた成相観音靈驗譚は、天橋立を中心とする丹後文化圏の中で在地的に発生し、それが京との関わりを持つにつれて広く伝播していった。時代は下り、西国三十三カ所が僧の間

で始められ、よりその靈驗の受容者は多くなり、民間へと信仰を集めていった。『法華驗記』や『元亨釈書』に表された齋遠の観音説話は、そうした成相観音靈驗が出来上がっていく以前の、「原成相寺縁起」に關与する可能性があると考えられる。結果的に内容が似ているものの、それらは別系統の観音靈驗譚として捉えるしかならう。信仰の面において、現世利益の救いを求める慈悲深き観音は、古くから人々の信仰を集めてきた。身代り観音靈驗譚の深層には、そうした観音の特性を生かしたことによる、人々が帰依する原因というものが存在している。成相寺や穴太寺にみられる身代り観音靈驗譚という、自らの損傷と引き換えに人間に救いを与える靈驗譚の構造は、時代性を考慮した上でも、信仰する人々の心を捉えて離さなかった。

こうした丹後における在地信仰は、例えば成相寺周辺でのみ信仰が巻き起こっていたと考えるのではなく、『丹後国風土記』などにも記される天橋立(逸文『風土記』「国生生大神伊射奈藝命、天為通行、而橋作立。故云天橋立。」)に纏わる神話的要素を、周辺寺社である智恩寺・籠神社を中心にして、おのおのの縁起とともに天橋立を取り込んで描いていったのである。天橋立を周辺の神仏靈場の中心となるごとく、一大靈驗所と見立てることで、鄙を鄙にさせなかった。かつて天と地上を繋いでいたとされる天橋立は古代人の心も繋いだのだ。

ところで、丹後には籠神社の神宮寺として位置されていたという大谷寺の存在があり、この地には『丹後國一宮深秘』を書いたとされる智海を中心とした不動信仰が存在する。大谷寺には智海が造ったとされる不動明王像があり、同時に彼は多くの不動像や墨画を残しているという。

智海が生きたのが十五世紀であるから、雪舟の「天橋立図」などと時代が重なることになる。別稿に譲るとするが、観音信仰とともに丹後に芽生えた不動信仰の側面は、霊地丹後の輪郭をさらに鮮明に描き出すことにつながると思われる。

(なお、本文引用については必要性を鑑みた上で、適宜旧字体を現行漢字に改めた。)

[注]

- (1) 速水侑「平安時代における観音信仰の変質―六観音信仰の成立と展開―」(『民衆宗教史叢書 観音信仰』雄山閣・一九八二年) および、『西国三十三所寺院の総合的研究』(中央公論美術出版・一九九〇年)
- (2) 現在配布されている成相寺縁起では「願う事成り合う寺」という説明が挿入されており、これは付加要素としての縁起の発展形のひとつであらう。
- (3) ちなみに、『伊呂波字類抄』と『阿婆婆抄』にはともに「如生身」という事術が見られる。「生身」については、阿部泰郎氏がかつて、成相寺と京都府亀岡市の穴太寺観音霊験譚について「狩猟を不可避に伴う殺生と肉食―死穢と血穢に塗れ、それどころか忌避せず、むしろその裡から(聖なるもの)がもたらされるといふ信仰のありかたを示している」、(『霊験ある仏道(あるいは仏像の霊験)を語りあらわすのに、中世に至って「生身」と呼ぶような伝承の流れが在った。』(「生身と流血―中世縁起・説話における仏の身体―」(『仏教美術における身体観と身体表現』所収・二〇〇二年三月)とされ、当該二作品の記述から述べられているわけではないが、成相観音が「生身」の観音であるという考えを指摘されている。身体から出血したりするなどという人間に例えられる行為を仏菩薩が行うことにより、一般における信仰をさらに深化させることが根底にはあると伺えるが、「生身」の観音を食べる、という行為は果たしてそうした思想と繋がっていくのだろうか。

か。さらなる解明が不可欠である。

- (4) 神谷吉行「御伽草子『梵天国』成立試論」(『相模女子大紀要』二〇・相模女子大学・一九六五年)
- (5) 「観音信仰と社寺参詣」図録解説文より(『観音信仰と社寺参詣―丹波・丹後―』京都府立丹後郷土資料館・一九八五年)
- (6) 松尾剛次「勧進と破戒の世紀」(『勧進と破戒の中世史』所収・吉川弘文館・一九九五年)
- (7) 成相寺観音霊験譚で描かれる、観音が鹿(または猪)の肉に成りかわり、それを食べ命を繋いだ僧が描写されるという点に現れるテーマは「肉食」である。修行者に肉を差し出すという観音の行為は肉食戒と表裏一体になる注目すべき一話であらう。春日神社関係の話や他の説話にも例が挙げられるように、鹿が霊性のある動物として存在していることも確認される。永藤靖氏は「鹿」というものが、記紀や『風土記』などに示されるように山の神の使いであったり、時に山の神自身が化した姿であると人々に幻想されていた動物であり、成相観音が鹿に変化して僧に施しを与えた事について「それはケガレた肉ではなくて、山の神が自らの肉体を与えたのであり、それを受肉化するといった、きわめて神聖な行為」であったと述べられる。奈良時代において一般的に肉食が行われていた資料を調査したが、それを考えた上で永藤氏の述べられるように仏教で問われる肉食、それに变化した観音の存在を、神道儀礼などに表されるそれと同系列で考えうるものなのか極めて疑問に思われる。同じ「シシ」と呼ばれ、肉の意を表す鹿・猪がこうした観音霊験譚など仏教的に文学にどのように取り入れられたのか、成相観音霊験が肉食というテーマを越えた受容の諸相については別稿に譲りたい。
- (8) なお、ここでは鎮源著とされる『法華験記』を引用する。引用本文は『日本思想大系7 往生伝法華験記』(岩波書店・一九七四年)
- (9) 林恒徳「今昔物語集」巻一六「丹後国成合観音霊験語第四」をめぐって―(殺生放生説話)の展開とかかわって―(『研究論叢―人文科学・社会科学―』第四一巻・山口大学教育学部・一九九一年二月)

(10) 『日本思想大系』における『法華験記』頭注を見る限り、前一二九話中およそ七割もの説話が『今昔物語集』の典故かとされている。ただ、ここでも確定はなされておらず、千本英史氏が『験記文学の研究』などで指摘されるように、『法華験記』が二話一類形式をもって後世に伝えられることには疑問点も多いとされている。

(11) 前掲『観音信仰と社寺参詣―丹波・丹後―』

(12) 『日本歴史地名大系』(平凡社)による。

(13) 速水侑『観音信仰と靈験利益』(『岩波講座日本文学と仏教』第七卷所収・岩波書店・一九九五年)

(14) 岡見正雄『小さな説話本―寺庵の文学・桃華因縁―』(『国語と国文学』五四―五 一九七七年五月)

(15) 黒田彰『三国伝記と恵心僧都物語―説草から説話集へ―』(『中世説話の文学史的環境 続』所収・和泉書院・一九九五年)

(16) 神田秀夫『天の橋立の風土』(『成蹊国文』第六号・成蹊大学文学部・一九七三年一月)

(17) 伊藤正義『久世戸縁起―謡曲「久世戸」の背景』(『叙説』第六号・奈良女子大学国語国文学会・一九七九年十月)

(18) 上田正昭『久世戸由来の記』(『観世』第三十九卷第一号・檜書店・一九七二年一月)。氏は「民衆の信仰においては、神と仏は対立するものとしてあったのでもなければ、まして対決するものとして存在したのではない。それはともに調和し融合して信仰された。」と述べられる。

(19) 海部光彦『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図―日本民族の魂のふるさと・丹後丹波の古代の謎―』(元伊勢籠神社社務所・一九九七年)

(20) 門脇禎二『古代史における日本海文化』(森浩一氏『シンポジウム古代日本海文化』・小学館・一九八三年)

(21) こうした籠神社周辺を「元伊勢」と称して、伊勢外宮の発端の地であるとのことは、歴史書、寺伝社伝等の記述からも多くの問題が存在する。本論では話題が逸れるため既存の研究史に従うが、国宝「海部氏系図」にも記されるような始祖を問う問題点は、天皇を神とした戦前

には闇に葬られ、戦後ようやく表出されることになり、こうしたことから現在解明されるべき点が多く残されている。

(たかくら みずほ 文学研究科国文学専攻修士課程)

(指導・黒田 彰 教授)

二〇一〇年九月三十日受理